

## 5 肥料

当研究所では、肥効調整型肥料\*（ハイコントロール トータル 391-270 270日タイプ）を、元肥として培地に混合しています。「1年生コンテナ苗」の場合、1キャビティ当たり2g（80g/トレイ）以上とし（図-13）、「2年生コンテナ苗」よりも多めに施肥します。

「2年生コンテナ苗」の場合、スギ、ヒノキともに、苗高がほぼ7～8cm以上あれば、1キャビティ当たり2g（80g/トレイ）でも、秋以降、苗長が山行き苗の規格サイズに達することが判明しています（図-14、-15）。苗長（苗高）が大きくなりすぎる場合、苗木の大きさに応じて1キャビティ当たり1～2gの施肥で様子を見ていくようにしましょう。

なお、肥効期間が700日タイプも発売されていますが、その効果については不明のため、当研究所が使用しています270日タイプの使用をお勧めします。

また、県内生産者では、緩効性肥料\*（IBS1号 大粒）を、年間、3～5回程度に分け、1キャビティ当たり1回に2～3個使用している事例もあります（後掲 図-55）。追肥\*のタイミングは、苗の葉色が薄くなった段階（脱色した段階）や、肥料の原形が認められない段階で行います。ただし、規格サイズに達した段階では、追肥を控えます。



図-13 肥効調整型肥料（トータル 391）

左側：商品 中央：トレイ施用量（80g/40キャビティ） 右側：肥料の形状

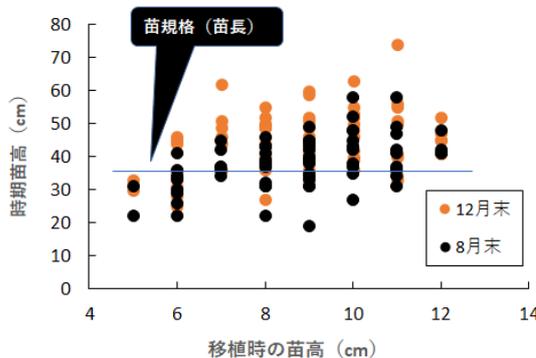


図-14 2年生少花粉スギコンテナ苗の時期別苗高

注. 1キャビティ当たりハイコントロール270日を2g使用

（説明）

少花粉スギでは、移植時の苗高が7～8cmあれば、かなりの割合で、12月には山行き苗規格に達します

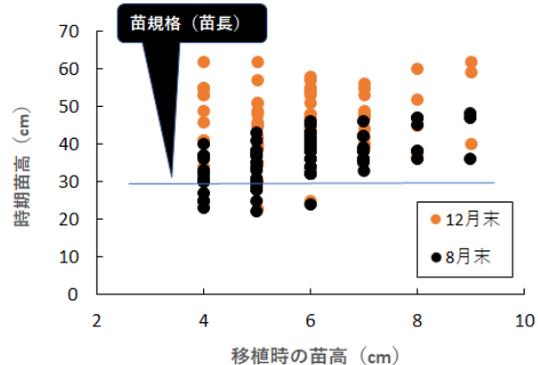


図-15 2年生少花粉ヒノキコンテナ苗の時期別苗高

注. 1キャビティ当たりハイコントロール270日を2g使用

（説明）

少花粉ヒノキでは、移植時の苗高が7～8cmあれば、すべての苗が12月には山行き苗規格に達します